「時空を超え、ビジネスを育む名建築たち ⑦」

国立国会図書館東京本館

「東京都・千代田区」

国内で発行されたほぼすべての出版物が揃う、国立国会図書館。永田町というまさに日本の中心に佇むコンクリート造りの空間は、知を求める人々の活気でつねに満たされている。東京本館を設計したのは日本のモダニズム建築の巨匠、前川國男（1905年～1986年）の薫陶を受けた建築家集団だ。前川の建築思想は確実に後進に受け継がれ、建物のすみずみに表れている。

取材協力：
国立国会図書館
前川建築設計事務所 橋本功氏（建築家）

参考文献：
『国立国会図書館七十年記念館史 デジタル時代の国立国会図書館 1998-2018』（国立国会図書館，2021）
前川國男建築設計事務所OB会有志著『前川國男・弟子たちは語る』（建築資料研究社，2013）／『国際建築』1953年1月号（國際建築協會事務所）
『建築文化』1962年1月号、1986年11月号（彰国社）　日経アーキテクチュア編『手すり大全』（日経BP社，2008）

国立国会図書館東京本館・本館。事務棟は地下1階、地上6階からなり、中央にある書庫は地下5層、地上12層に及ぶ

日本近代建築への問いかけ

図書をはじめとする資料で国会議員をサポートすると同時に、行政や司法、そして日本国民に奉仕することで民主主義と世界平和に寄与する――この使命のもと国立国会図書館が設置されたのは、戦後間もない昭和23年（1948年）のことだった。赤坂離宮（現・迎賓館）などを仮庁舎として開館し、昭和43年（1968年）、永田町の国会議事堂の向かいに現在の東京本館・本館が完成した。昭和61年（1986年）には本館の北隣に新館が完成し、およそ1200万冊の収蔵が可能に。利用者の請求を受けて職員が書庫から資料を出納する閉架式図書館として一般に利用されている。本館、新館ともに基本設計はミド同人[*1]。前川國男が立ち上げた建築家集団だ。

前川の建築思想の根底に流れるのは、彼が高校時代に読んだジョン・ラスキン[*2]の著書『建築の七燈』に示されている「建築のデザインは材料と工法によって決まる」という考え方だ。後年、フランスのル・コルビュジエ[*3]が近代建築のリーダーとして注目されると、その近代合理主義建築に共感した前川は昭和3年（1928年）、大学卒業と同時に渡仏し弟子入りした。

産業革命以前のヨーロッパ建築はルネサンスやゴシックに代表される様式主義であり、石や煉瓦の組積構造による王侯貴族のための建築だった。それを否定したのが、当時最新の科学技術を用い、コンクリートの柱やスラブ（平板）などによって構成される、市民のための近代建築だ。

＊1　Mayekawa Institute of Design＝MID（ミド）

＊2　John Ruskin（1819年～1900年）。19世紀イギリスのヴィクトリア時代を代表する美術評論家。

＊3　Le Corbusier（1887年～1965年）。スイスで生まれ主にフランスで活躍した建築家。フランク・ロイド・ライト、ミース・ファン・デル・ローエとともに「近代建築の三大巨匠」と呼ばれる。

All Rights Reserved, Copyright ©2023, Hitachi, Ltd.

本館の2つの階にまたがって設けられたピロティ。地上部分の柱を残して外部空間とする建築形式で、コルビュジエが近代建築五原則の1つとして提唱していた

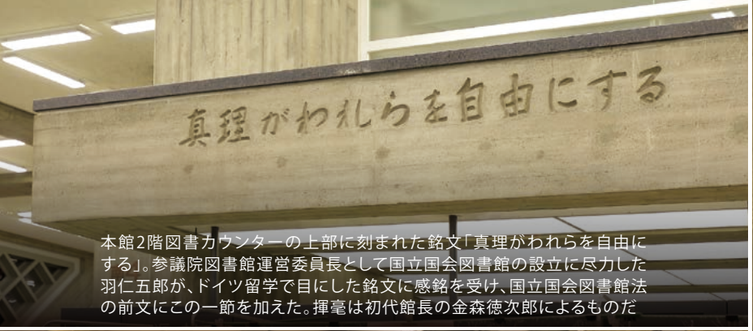
本館のテラスの四隅には、プレキャストコンクリート製の太い手すりが互い違いに飛び出している。前川國男が設計した京都会館にも見られる寺社建築の高欄を意識したデザインだ

本館の各階のテラスには一直線にプレキャストコンクリート製の手すりが伸びる。前川國男にとって「手すり」は建物の水平性を強調する言葉であり、建築を構成する重要なデザイン要素だった

コルビュジエに近代建築の基礎を学んだ前川は昭和5年（1930年）に帰国。アントニン・レーモンド＊4の事務所に入り、実践を通じて建築の実技や事務所の運営といった実務を学んだ。同時に、レーモンドの薫陶を受けるなかで、後進を育成するうえでの組織のあり方や指導方法も身につけていった。そして昭和10年（1935年）、30歳にして前川國男建築設計事務所を開設する。

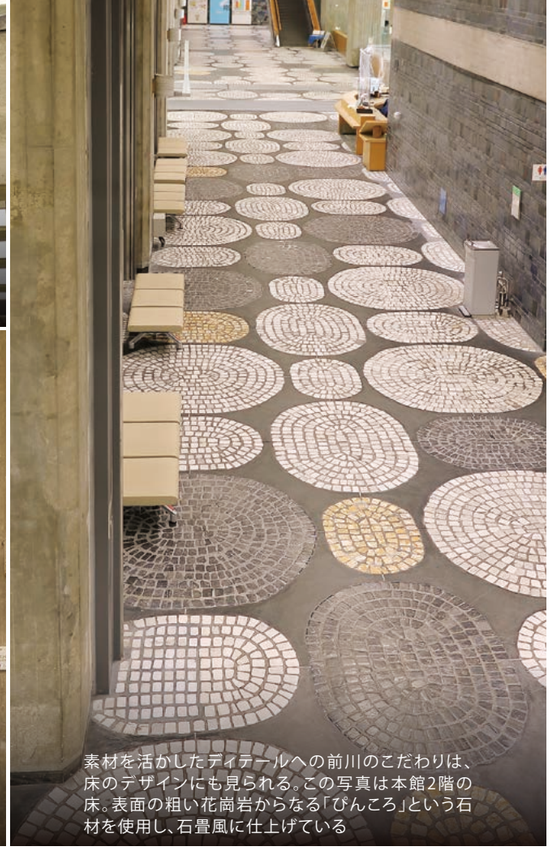
当時の日本にはまだコンクリート技術が普及しておらず、木材で近代建築風のフラットルーフを構成した見せかけの建築が多かった。

国立国会図書館東京本館 配置図（提供：彰国社）

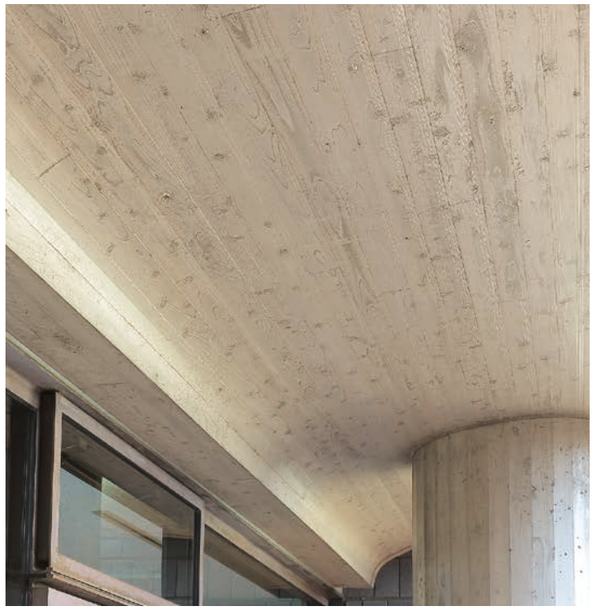


本館2階図書カウンターの上部に刻まれた銘文「真理がわれらを自由にする」。参議院図書館運営委員長として国立国会図書館の設立に尽力した羽仁五郎が、ドイツ留学で目にした銘文に感銘を受け、国立国会図書館法の前文にこの一節を加えた。揮毫は初代館長の金森徳次郎によるものだ

本館中央のホールを取り囲む柱列には巨大なブレース（筋交い）が設けられ、ステンドグラスがはめ込まれている。2010年から2013年にかけて行われた耐震工事では、既存のデザインを活かし格子状の鉄骨で補強した



素材を活かしたディテールへの前川のこだわりは、床のデザインにも見られる。この写真は本館2階の床。表面の粗い花崗岩からなる「びんころ」という石材を使用し、石畳風に仕上げている



外部の柱や庇、地上階の柱や梁の打ち放しコンクリートは、杉板の特殊型枠で成形。美しく転写された杉板の木目が、本来は無機質なコンクリート面の表情に温かみを持たせている

本館内部の壁にあしらわれた色とりどりのタイルにも、ディテールに対する前川のこだわりが見られる

「単なる造形的興味からする絵空事でない建築の、技術的な経済的な前提からの形の追求を今身につけなかったならば、日本の新建築は永久にひとつのファッションに終始せねばならないであろう」（『国際建築』1953年1月号より、原文ママ）との危惧を抱く前川は、彼の言葉であるテクニカル・アプローチで素材を駆使してこそ建築の自由を得られると考えた。

＊4　Antonin Raymond（1888年～1976年）。チェコ出身の建築家。アメリカのフランク・ロイド・ライトのもとで学び、旧帝国ホテル建設の際に来日。その後日本に留まり、モダニズム建築の作品を多く残した。

外観と空間構成に見る前川イズム

「近代建築は一人の建築家だけではなしえない」との考えから、前川は自身の思想に共鳴する建築家たちとグループをつくり新たな建築を唱えるべく、昭和22年（1947年）頃にミド同人を立ち上げた[*5]。のちに国立国会図書館本館[*6]を設計する田中誠[*7]や大高正人[*8]といった気鋭の建築家が集った。

自らが描いたスケッチを所員に示して図面を描かせるという指導法を前川はとらなかった。ベテラン、中堅、若手の混成チームでプロジェクトに臨み、それぞれが図面を作成したうえで辛辣な意見交換を何度も重ねる。ようやく一つの案にまとまってきた段階で前川が「どうだね」と顔を出すと、製図室に緊張が走る。「ここがおかしいね」「こういうのはどうだい」せっかく清書した図面の上から、前川が赤鉛筆で修正を加えていく。所員の間ではこれを「空爆」と呼んでいた。

前川の指摘をもとに所員自らのアイデアも加え、図面をブラッシュアップしていく。前川の押し付けではなく、図面の上で互いに手を動かしながら対話を重ねるなかで、あるべき人の流れ、あるべき空間を考えていく。これが前川の育成スタイルだった。

昭和29年（1954年）、前川の薫陶を受けたミド同人のメンバーが国立国会図書館本館の設計者に選定された[*9]。長い年月に耐えられる美しい素材を外壁に用い、国会議事堂を中心とする官庁街の風景に調和した外観。そして、荷重条件がまったく異なる書庫と閲覧スペースを明確に分離し、利用者の動線や採光、音響に配慮した空間構成が選定案の特徴だ。

この設計の随所に前川の考え方が見られる。まずは、コルビュジエの影響を強く受けたドミノシステムと呼ばれる空間構成。4本の柱とフラットな天井、床からなる単位空間をいくつも連続させることで、本館の中核に位置する書庫をぐるりと囲むシンプルなレイアウトとなっている。

さらに、不規則な床模様、ステンドグラスをはめ込んだブレース（筋交い）など、壁や床の細部に前川が心血を注いできたテクニカル・アプローチの建築思想が色濃く表れている。

工事が2期にわたった影響により当初の案からの大きな設計変更を余儀なくされたが[*10]、基本的な平面構成はそのままに、趣のある経年変化をする素材を使うことで建築の永遠性が表現されている。

昭和61年（1986年）、中田準一[*11]らの設計による新館の完成を見て、前川國男はこの世を去った。日本人の知を育む巨大な図書館の陰には、時代を超えて受け継がれてきた建築家たちの思いがある。形だけではない民主主義、見かけだけではない近代建築。その双方の象徴が国立国会図書館東京本館だ。

新館1階から4階に至る大きな吹き抜け。2本の柱で各階の地震力（地面が揺れることで建物に働く力）を支えるダブルコラム構造が連続するダイナミズムは、新館の象徴と言える

新館の壁面には、コンクリートにノミで凹凸を加えた斫（はつ）り工法が見られる。また、木製の太い手すりも前川建築に見られる特徴の1つである

新館書庫の地下8階まで自然光を採り入れられる光庭（ひかりにわ）。ここにも壁面に斫（はつ）り工法が見られる

新館の外壁は、外光を調節するルーバーの働きを持った穴あきのプレキャストコンクリートにタイルを打ち込んだもの。外断熱の効果があり、美術館の建築に用いられることが多い

＊5　MID（ミド）の名称が初めて公に使用されたのは、1947年11月発刊の『前川國男建築設計事務所作品集』。編者名が前川設計研究所（MID）となっている。

＊6　現在の東京本館・本館。

＊7　前川國男建築設計事務所設立以来、専務取締役として設計や事務所運営を支えた。

＊8　1962年に独立。千葉県文化会館や市営基町高層アパート（広島市）などを設計した。

＊9　前川國男もメンバーの1人として名を連ねている。

＊10　本館の基本設計は前川國男建築設計事務所が、実施設計は建設省（当時）が担当した。基本設計が進んでいた1955年10月の時点で、工事を2期に分けて実施することが決定。第1期工事（1956年8月～1961年7月）完了後に、本館を供用しながら第2期工事（1966年12月～1968年8月。同年12月全館完成）が行われた。これにともない平面計画が変更されたほか、外観の特徴であった穴あきプレキャストコンクリートを使用した外壁案も変更となった。

＊11　1965年、前川國男建築設計事務所入所。埼玉県立博物館や熊本県立美術館などを設計した。